

## 広島の良い口に乾杯！

江川先生の個展を訪れて

白 矢 勝 一

3月21日、広島に日本医家芸術クラブ会員の江川政昭先生の初の油絵展25年の歩み を見に行った。広島は昔訪問した時と異なり大都市になっていた。広島焼きを食べ、タクシードラッグで画廊ギャラリーブラックへ。私の医局時代からの親友、竹中康夫先生がタクシーから降りてつろつろ迷っていた私を出迎えてくれた時は、とても嬉しかった。

ギャラリーブラックの1階、階段2階に先生の素晴らしい作品が並べられていた。毎年東京銀座で開催される医家美術展先生の作品を拝見してきているが、今度小品から100号など大きな作品まで展示されていたので、作者の作風、テーマ、変遷など江川政昭



作品の前で（左から）竹中、白矢、江川の各氏

画伯の全てを鑑賞させて頂けたように思う。空や海、船の錆びにおけるタッチは先生独自の素晴らしいもので、とても真似できるものではない。名人の域に達している。初期の作品らしき絵は画風が現在のものと異なるが、個性というものは隠せず、どこかに江川先生の顔が感じられる。タイトル 25年

の歩み はまことに作家の絵画の本質を追求する姿を現すタイトルであった。会場には熱心に絵を鑑賞する方々が数多かつた。その会話は絵画の歴史や道具や技量まで、大変絵画に詳しく、知性溢れる内容で流石先生の個展にお集まりになる方々だなと思われた。

会場を後にして竹中先生のご自宅に。奥さんや娘さんにケーキやお茶をご馳走して頂き、昔話に花を咲かせた。竹中先生とは東京大学眼科医局入局以来、大学、大宮日赤と一緒させて頂いた。私が九段坂病院の医長になり、彼が養育院の医長になった後も手術を共にしてきた仲である。若い頃に苦業をともした生涯の友のご自宅を訪問できたことは誠に幸福であった。

夜は江川先生、渡辺晋先生、竹中先生とこの長男と広島立派な料亭で食事。この楽しい会食で再会できたのが竹中先生のご長男である。今は広島在住だが、スーパーローションで

千葉の旭中央病院での研修期間、父親の竹中先生に、「白矢というすごい先生がいる」と電話したそつな。しかし、実は「それは白矢（勝一）の息子（智靖）で昔一緒に押入れの中で大暴れしただろうが」と竹中先生。昔のアルバムには我々二家族で旅行した時、小さい息子たちが大騒ぎした記録が残されている。両方の子供たちもともに医師になり、これから助け合い、良き眼科医になってくれたらと願う。

渡辺晋先生、ペンネーム天瀬裕康、広島ペンクラブ幹事、「広島文芸派」同人、「新青年」研究会・会員、ぎんのです研究会・会員）は最近『梶山季之の文学空間』を出版されている。私自身梶山季之のファンで、悪人志願などほとんど読んだと思っていたが、先生から全く違った梶山季之の側面を教えて頂いた。

先生は広島県大竹市という遠路にも関わらず總會にご出席頂いているほか



大竹市から駆けつけられた天瀬裕康先生（右端）を迎えて「乾杯のひとつとき」を楽しみました

医家芸術の文芸特集号に力作を寄せられたり、自費出版で医家芸術誌の創刊号（1957年9月）から554号（2003年12月号）までの目録づくりなど、多大な貢献をして頂いたりしており、紙面上で再生委員長として改めて御礼を申し上げます。

また、座談会アンコール特集（復刻版）には原爆と広島（の医師）出席者

今中龍雄 川堀耕平 門前徹夫 坂下英明）があり、そこには広島（の医師）の務めという言葉が載っている。渡辺先生が原爆ドームの絵や文芸作品を長年にわたって表現されているのも今回顧できた。

私はさらに興味をそそられ、インターネットで天瀬裕康を検索した。すると、「大宅壮一と梶山季之、そして藤倉一郎」を見つけ、当会員で文芸部で活躍の藤倉先生が大宅壮一の臨終に立ち会ったと知り感動した。

医家芸術クラブは様々なところでつながり、社会にも大きな貢献をしてきたクラブなのである。広島（の酒や料理）が胃袋を満たした以上に、素晴らしい先輩や仲間たちとの再会に心も満たされ、もう一度「乾杯」！

\* 江川政昭油絵展 3月17日

23日まで開かれました。

油絵 42点 鉛筆画 15点